

SOGI に敏感な視点による社会福祉（学）に向けて

○ 四国学院大学 大山 治彦 (003257)

キーワード3つ: SOGI、ヘテロセクシズム、シスジェンダー主義

1. 研究目的

本論の目的は、スウェーデンにおける SOGI 平等へのとりくみに触れながら、LGBTQ+の可視化が、社会福祉学やソーシャル・ワークなどの実践を、どのように変化させるのか、論ずることである。LGBTQ+がある特定の人々を差し示す概念であるのに対して、SOGI (Sexual Orientation and Gender Identity) は、すべての人が持つ属性／特徴を意味する概念であり、すべての人を視界に入れるものである。SOGI に敏感な視点 (SOGI-sensitive perspective)、もしくは SOGI の視点とは、シスジェンダー (cisgender) と異性愛を個別特殊なセクシュアリティとして相対化し、ヘテロセクシズム (heterosexism) やシスジェンダー主義 (cisgenderism) を克服する視点のことである。

2. 研究の視点および方法

本研究は文献研究とスウェーデンでの現地調査によるものである。現地調査であるが、2018年9月と2019年9月に、半構造化面接法を用いて、関係者への聞き取りを実施した。

3. 倫理的配慮

研究は、本学会の「研究倫理規程」、「研究倫理規程にもとづく研究ガイドライン」、および所属校の「研究倫理規定」、「人を対象とする研究倫理基準」を遵守して実施した。具体的には、調査では、その目的、内容などについて、対象者の母国語もしくは英語にて、書面と口頭で説明し、同意を得るなどした。さらに、本報告では「学会発表に関する注意事項」に従うものとする。また、本報告に関連して、開示すべき COI はない。

4. 研究結果

1) 平等オンブズマン、性指向オンブズマン

「平等オンブズマン」 (Diskrimineringsombudsmannen : DO) は、2009年1月に4つのオンブズマンを統合したもので、SOGI を含む7つの差別に対応している。行政機関による差別のみならず、民間の企業などによるそれも取り上げることができる。統合によって、複数の領域に渡る差別問題に、ワンストップでトータルに対応できるという。「性指向オ

ンブズマン」(Ombudsmannen mot diskriminering på grund av sexuell läggning: Hom0)は、1999年から約9年間、独立したオンブズマンとして存在した。一貫してオンブズマンを務めたのは、LGBTQ+の人権団体である「RFSL」(Riksförbundet för homosexuellas, bisexuellas, transpersoners och queeras rättigheter)の元代表であった。SOGIによる差別に関する認識をひろめ、差別の解消などに大きな役割を果たしたといえる。

2) HBTQ 認証

「HBTQ 認証」(HBTQ-certifiering)は、LGBTQ+の職員の労働環境や、LGBTQ+の顧客(利用者)への接遇の改善にとりくむ組織に、その旨の証明書を発行する制度である。なお、HBTQとは、スウェーデン語でLGBTQのことである。このような認証を発行する団体には、行政機関や、RFSLのようなNGOもある。認証を受けている機関には、医療、福祉関係も多い。HBTQ 認証の取得は、職員に対して、利用者のみならず、同僚にもLGBTQ+がいることを意識させるものであり、認証取得をきっかけに、LGBTQ+への差別の解消のとりくみが推進され、そのような職員が安心して働ける職場づくりに寄与している。

5. 考察

本報告の結論は、1) 今後、社会福祉学やソーシャル・ワークなどの実践において、SOGIに敏感な視点が必要不可欠となり、SOGIの主流化が求められること、2) このような変化は、社会福祉に関わる者すべてにかかわる大きな変革であること、である。

SOGIに敏感な視点による社会福祉学やソーシャル・ワークなどの実践とは、研究や福祉サービスの対象にLGBTQ+を加えることや、LGBTQ+フレンドリーな研究や実践を意味するものではない。シスジェンダーの異性者を標準、中心とし、LGBTQ+を標準とは異なるものとして、周縁化や“問題化”、有徴化し続けることに終止符を打つことである。

スウェーデンにおけるとりくみは、LGBTQ+に人権を保障、擁護し、そのウェルビーイングの増進に貢献する方法として、日本においても、大いに参考となるものといえる。

かつて、ジェンダーに敏感な視点(ジェンダーの視点)が、社会福祉学やソーシャル・ワークなどの実践に導入されたとき、周縁化されていた女性を中心化され、社会福祉のあり方に大きな影響をあたえた。同様に、SOGIに敏感な視点の導入とSOGIの主流化、そしてLGBTQ+を中心化は、社会福祉学やソーシャル・ワークなどの実践において自明とされていた概念や用語、方法などの見直しを迫るものとなる。また、それらは、社会福祉学やソーシャル・ワークなどの実践に関わる者に、その無意識のヘテロセクシズムやシスジェンダー主義について、自己省察を求めるものとなる。このように、LGBTQ+の可視化は、社会福祉にかかわるすべての人たちに影響をあたえるものなのである。

謝辞：本報告は、日本学術振興会(JSPS)の科学研究費による研究のスピンオフである(26570018、15K01935、18H00937、18K11911)。記してお礼申し上げます。